

台湾への修学旅行は苦勞に比しても得るものは大きい

# 台湾修学旅行のすすめ

前熊本県立天津高校校長

白濱裕しらはま ひろし



天津高校の台湾修学旅行（台北市）

## ◆修学旅行先に台湾がなかった！

熊本県立天津おつづ高校は、去る十二月三日から六日まで、四回目となる台湾への修学旅行を実施しました。

現校長のお話によると、一昨年は尖閣問題、昨年は中国の防空識別圏の設定など、出発直前に懸念材料もありましたが、今回は万事スムーズに運び、すっきり定着した感があり、生徒や同行した保護者（PTA役員）の満足度も大きかったとのことでした。このように、後任の校長先生の努力や保護者の理解によって、途切れることなく順調に実施されてきたことに前校長とし

てはっとしています。

さて、天津高校が三年前の平成二十三年十二月に、学年単位（一年生八クラス）では県内で初めて台湾修学旅行を実施して以来、大きく前進した県政や教育委員会の台湾修学旅行への取り組みについて、少し時間をさかのぼって述べてみたいと思います。

天津高校が台湾への修学旅行実現に数年の期間を要したのは、本県の「修学旅行に関する実施基準」の渡航先に「国外の場合は原則として韓国、中国とする」とあり、台湾が記載されていなかったことが主な原因でした。

天津高校の場合は、結果的に例外と

して承認に至ったのですが、やはり、渡航先に台湾を明記することが後に続く学校を増やすことにもなると考えていたところ、たまたま一昨年、ある県議から議会で台湾への修学旅行振興に關して質問したいという連絡を受けました。そこで、その旨をお伝えし、知事、教育長に対して質問していただきました。その結果、渡航先は「韓国、中国及び台湾とする」と台湾が追記され、また、県教委の決裁を受ける修学旅行承認申請書の提出期限が一年以上も前になっていたものが、半年前までと短縮されることになりました。このことは、手続き面でのハードルを下げ

ることにつながったと思っています。

## ◆高雄市との交流促進覚書

さらに、熊本県における台湾との関係深化に貢献した大きなターニングポイントといえるのは、昨年九月九日、蒲島郁夫・熊本県知事と辛山政史・熊本市長（当時）が訪台し、陳菊・高雄市長との間で合意した、①貿易及び投資等の促進、②観光、教育等の分野における相互交流促進、③定期便就航へ向けた協力、を主な内容とする「国際交流促進覚書」の締結でした。

この覚書締結を契機として、高雄市を中心とした台湾との国際交流を促進するため、定期便就航へ向けた航空会社等への知事のトップセールスが数次にわたって行われ、ついに今年十月末には、初めて熊本から台湾高雄への週三回の定期的な直行便が実現することになりました。

覚書締結後、県庁各課においても、定期チャーター便の就航に加え、上記

②の「観光、教育等の分野における相互交流促進」に関していくつかの取り組みが行われてきました。

一つ目は、県教育委員会（高校教育課）の新規事業として、「県内高等学校における海外修学旅行の促進に向けた現地調査及び検討」のために「高校生海外修学旅行促進事業」を立ち上げたことです。

この事業は「平成二十七年度に海外修学旅行の実施を検討している県立高等学校において、学校関係者及び保護者による旅行予定地の現地調査を行い、現地の学校や研修先、宿泊施設等を確認し、その成果を普及させることにより、県内高等学校の海外修学旅行につながる」という趣旨で、今年の夏休みを実施されました。参加校は三校（熊本市内一校、県南二校）の学校職員（二校は校長参加）および保護者代表（PTA会長）で、烏山頭ダムを含む

台南、高雄、台北を巡るものでした。その結果、特筆すべきは、参加した高

校の内、県南二校が来年十二月に台湾修学旅行に踏み切り、市内の一校も再来年度実施に向けて準備を始めるという成果を収めました。

その後、十一月には、県の高P連理事会で、参加した学校の会長が視察の概要を報告したところ、出席した各校の会長から前向きな質問が多数出たことで、保護者の関心の高さを伺わせるものでした。

来年一月には、県立学校長会で参加校の校長の報告が行われる予定で、これらの動きに鑑みると、今後その他の高校でも具体的な検討が始まるものと期待しているところです。

なお、来年度、大津高校に続いて台湾修学旅行の実施に踏み切った県南二校の校長は、私も現職時代同動したところもある親しい間柄でもあり、求めに応じて、電話や学校訪問をして大津高校の事例等について情報提供を行ったりしてきました。

また、日本李登輝友の会熊本県支部

(廣瀬勝支部長)が今年四月半ばに催

した「台湾留學生との交流会」などに招待したり、台北駐福岡經濟文化弁事処の戎義俊処長(総領事)や同弁事処の修学旅行担当処員を紹介し、便宜を図っていただくよう依頼しました。

両校とも一年後の実施に向けて、事前学習や日程・費用等の詰めが残っていますが、両校長が郡部の学校であればこそ、生徒を「内向き志向」から脱却させることの重要性を認識し、日本統治時代からの我が国と台湾との親密な交流の歴史を説き、保護者の最大に関心事である安全確保に対して、信念をもって保護者や関係機関を説得された賜だと思っています。今後も、両校に対して私の立場でできる限りの支援を行っていきたいと思っています。

また、今年度は専門高校における農業や商業部会の海外研修として、各校から選抜した生徒たちで組織した台湾訪問団を派遣するなど、学校を横断した様々なセクションで台湾への関心が

高まってきています。

### ◆行先を台湾に変更した県事業

二つ目の取り組みとして、県の知事部局(環境生活部)が担当して、今年八月に実施した「グローバルジュニアドリウム事業」が挙げられます。

本事業は昨年度までは、選抜した小・中・高生を沖繩に派遣するなど、「ジュニアドリウム事業」と銘打って行われてきましたが、今年度は名称を変更して「世界の中の日本・郷土熊本に誇りを持ち、グローバル社会で活躍するリーダーの育成を図る」ため、行き先を台湾に変更したものです。ちなみに、高校生リーダー五名中二名が台湾修学旅行を経験した大津高校生(最多の十名応募)でした。

事前に担当者から旅程等について相談を受けましたが、特に熊本出身の六士先生の一人平井数馬ゆかりの「芝山巖」がコースに入り、報告書で次のような感想に触れたときは、大変嬉しく

感動しました。

「私は、耳が聞こえないのですが……見学先として訪れた「六十先生」の説明がよく分からなかったので、帰ってから調べてみると、あまり知られていない事実がびっくりしました。いつ殺されてもおかしくないのに、身を以て住民と共に教育の仕事を続けたことでした。教育に対する情熱、精神が人々に語り継がれて、戦後にこわされたお墓を建て直していることに心を動かされました。日本統治後、就学率が〇・五%だったのが、一九四三年には七〇%になり、戦後の識字率は九二・五%になり、これが台湾の經濟発展の基礎になっっているそうです。このことも友好につながっており、本当に嬉しいですね。」  
ここには、戦後の自虐史観から解き放たれた子供の素直な感想が透ちがっています。私が、大津高校の台湾修学旅行のコースに、敢えて芝山巖をはじめ烏山頭ダム、二二八紀念館を入れた素志も実はここにありました。

## ◆一校でも多く増やしたい

今年五月、福岡市で開催された「台湾教育の現状と修学旅行セミナー」では、私も「台湾修学旅行のすすめ」と題して報告させていただきましたが、福岡の戎義俊弁事処長は次のような挨拶をされました。

〈台湾は世界一の親日国家で観光交流、人的往来が頻繁だ。一方で、日台両国の青少年は、互いに相手国に関して浅い認識しか持っておらず、「修学旅行」



最初の台湾修学旅行で烏山頭ダムに八田與一像を訪ねる  
大津高校生（2011年12月9日）

の重要性は高い。台湾の近代化のために犠牲となった日本人たちについて学ぶことで理解も深まる。修学旅行が、日台友好の架け橋となった先人ゆかりの場所を訪ね、偉功を偲ぶことで、生徒たちが世界に大きく眼を開き、日本人としての自覚と国際感覚を身につける契機になることを願っている。今後、九州各県の高校が陸統として台湾への修学旅行を実施し、多くの高校生が台湾を訪問することで、各県と台湾間の観光、物産、交通の活性化に繋がることを期待する。〉

近年、全国的に見ても台湾への修学旅行実施校は中国を上回り、以上述べたように、熊本県においても明るい兆しが見えつつあります。ただ、旅費の問題や保護者や職員の理解をどう得るか。また、国際情勢に左右されやすく、催行の直前まで気を遣わなければならないなど課題は多くあります。しかし、戎処長のお言葉にあるように、台湾への修学旅行は、その障碍を克服

する苦勞に比しても得るものは大なるものがあると確信します。今後とも一民間人として、一校でも多く台湾修学旅行に踏み切る学校を増やすため微力を尽くしていきたいと思っています。

最後に、大津高校生が台湾修学旅行後に詠んだ短歌を記します。

秋の日に異国の地へと旅立てり心優し  
き麗しの国へ

交流会みんなで楽しくしゃべったよ班  
行動も楽しかったね

自主行動自分たちで行動し深まりあつ  
てゆくみんなの絆

八田さん台湾の歴史に名が残る存在大  
きい日本の先輩

台湾に潤い齎す烏山頭汗と涙の努力を  
残し

台湾のいろんな所見てまわり心に残る  
人の優しさ

初めての台湾の地で学んだよ日本人つ  
て愛されていると

台湾で人に出逢って気付かされた二つ  
の国のそれぞれの良さ